

## 日葡辞書から見た安土桃山時代の医学—— 一、医療用具

亀 節子

大 槻 彰

前 川 久太郎

一九八〇年五月、岩波書店より“VOCABULARIO DA LINGUA DE JAPAM com a declaração em Portugues”  
(ポルトガル語の説明を付したる日本語辞典)の日本語訳が刊行された。所謂、長崎版『日葡辞書』の邦訳本である。

異文化交流は常に言語の習得を以て始められるが、キリスト教の布教という目的の為に我が国を訪ずれた宣教師たちも例外ではなかった。一五四九年八月イエズス会士として初めて日本の土を踏んだフランシスコ・ザビエルは、到着後三ヶ月目の書簡の中で次のように述懐している。「われらは言語を解さず、黙然としており、いままた子供のように言語を学ばねばならない」<sup>(1)</sup>。事実、ザビエルより二十八日遅れて来日したロドリゲス・ツズの『日本教会史』は、時の△国王▽後奈良天皇への謁見を試みたザビエルら一行の動向を「……彼らは数日間公方の邸の門前にたたずんでいたが、行きかう人々に三人の奇妙な服装をした異国人「とその伴侶」の姿が目にとまらぬはずはなく、人々は通りすがりに、いったいこれは何者で何をしようというのか、とたずねあった。シャビエルが教語かたりかけると、彼らは耳を傾けることなく、その言葉使いを嘲笑しながらとおり過ぎた」<sup>(2)</sup>と記し、日本語を自在に解することも話すこともできなかったザビエルらの困

難な布教情況の一端を証している。

こうした体験を背後に、布教のための下準備として日本語習得に乗り出した各宣教師の研究成果の中で、最初に形を成し始めたのが一五五〇年代の、イルマン・シルバによる文典と辞書の編纂であるが、一五六四年には早くも、イルマン・ジョアン・フェルナンデスによる『日本文典』、『日葡・葡日辞書』として本格的なまとまりを示した。さらに、その稿本に二十年にわたって加筆し続けたルイス・フロイス<sup>(4)</sup>、教育機関としてのセミナリオやコレジオを開設した巡察使アレッシャンドロ・ヴァリニャーノ、日本語教授養方軒パウロらの尽力により辞書の編纂事業が推し進められ、天草学院刊『羅葡日辞典』に次いで、一六〇三年世に送り出されたのが、この長崎版『日葡辞書』である。

当時、イエズス会の活動範囲は九州を主とした近畿以西の地域であり、また、布教対象が一般庶民から大名・公家まで及んだことから、『日葡辞書』では、特に西日本地方の話し言葉を中心とした各層の日本語が取り上げられている。収録語総数三万二千二百九十三語に達するこの辞書は、近世から中世にかけての我が国の言語の様相を映し出した貴重な資料だとされながら一部の識者の利用を俟つのみであったが、邦訳『日葡辞書』(以下『日ポ』と略)の刊行によって、幅広い活用が可能となった。

今回、この中から、医療、病氣、身体などに関する語を拾い上げたところ、約千三百語に及び、当時の人々の暮しの中の病氣や医療の実態を知る手掛りとなると考え、若干の紹介と考察を試みることにした。

まず、最初に医療用具を取り上げる。

医療用具、並びにそれに関係した語は見出し語の中に三十余り挙げられている。即ち、――薬刻み 薬刀 竹刀 薬盤  
薬研 沙鉢 乳鉢 薬鍋 薬鐘 甌 煎じ薬 煎薬 煎じ減らし 煨<sup>クイ</sup>する(以上、製薬・服薬段階の用具及び用語)、薬袋<sup>メスリツクロ</sup>  
薬袋<sup>ヤクタイ</sup> 印籠 薬籠<sup>ヤクコウ</sup> 薬籠<sup>ヤクコウ</sup> 薬箱 薬器 薬貝(以上収納用具)、平針 銀針 金針 鉄針 止針<sup>トメバハリ</sup>(留針) 打針<sup>ウチバハリ</sup> 灸 艾  
(以上鍼灸関係用語)、薬筒 筒じん 押し薬 浸瓶<sup>シメビン</sup> 温石<sup>オンシツク</sup>(以上服薬・鍼灸以外の医療用具)であり、問題は以下の何点かに

集約される。

一、「本道医中ニ当時無<sub>二</sub>針之名<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>云<sub>二</sub>道之零落<sub>一</sub>歎」と『中原康富記』に記されて後百数十年、室町時代には衰微していたとされる鍼術も一般の治療としてなお行われていたことのひとつの証拠として、鍼灸関係用語の収録が挙げられる。

『日ボ』成立当時、我が国では、曲直瀬道三(一五〇七～一五九五)、御菌意齋(一六一六)等の活躍により鍼灸治方は再興の様を呈し始めるが、御菌意齋が創始したと伝えられる「打針」、及び「金針」と「銀針」が既に収録されている点の特筆に値する。従来、鍼の種類は、『靈枢九鍼十二原編』による九鍼の区別に倣って、形体と用途を以て分けられていたに過ぎず、素材としてはすべて鉄が用いられているのが普通だった。従って、「金銀ノ性溫柔ニシテ、人体ニ適スルコトヲ知り、始メテ之ヲ以テ鍼を製シ<sup>(5)</sup>」た御菌意齋の業績は、今日のイオン鍼や電気鍼への発展にさえ通じる端緒を孕んだ画期的なものだった。恐らく、当時として異例の速さで一般にも流布し始めたのではあるまいか。もともと、「銀針」という語句については、『太平記』の『吉野御廟神靈事』に「眼の光輝いて左右の牙銀針を立てたる様に上下に生ひ違たり」という記載があつて、一四世紀に既に使われてはいるが、一般に鍼治方として用いられていたものとは言い難い。

この意齋流の鍼法には、「火曳之針<sup>ヒヒキ</sup>」「勝繫之針<sup>カセキ</sup>」「負曳之針<sup>マケヒキ</sup>」「相引之針<sup>アヒヒキ</sup>」「止針<sup>トドメ</sup>」「胃快之針」などがあり、これら数種の鍼法のうちのひとつである「止針」は『日ボ』に収録されているのと同じものか、『日ボ』には「止針<sub>二</sub>下痢をとめるために身体の一部に刺す針」と説明されていて、『針道秘訣集』に「止針<sub>二</sub>立ツ所ハ両腎ナリ、命門ノ相火ノ亢上スルヲ止ムルノ針ナリ」とあるのと内容的にもほぼ一致する。

また、「平針」は『日ボ』に「馬や人間の刺絡をする刃針〔刺絡針〕。例、(平針を立つる)血を取るために刺絡をする」として記されているが、『日ボ』以前には使用を見ない語である。

二、『日ボ』以前の我が国の文献には見当たらない語に前述の「平針」の他、「乳鉢」と「瘦瓶」の二つがあり、この時代

には二語とも日本語の中に定着していたことが確認される。

「乳鉢」は、中に薬を入れて碾き砕く道具の一種で、我が国では古くから使用されている薬臼、薬研に相当する。ただ、薬研が主として鉄製であるのに対して、「乳鉢」の方は、瑪瑙、アルミナ、磁器、ガラス等、多種の素材から作られる。この「乳鉢」という言い方がいつ頃から日本で用いられ始めたのか明らかではないが、一二世紀に編纂された中国の『宣和書譜』の中に「乳鉢」なる語が見い出せることから、いずれ中国より伝来した語であるには違いない。

「瘦瓶」という言い方も、また、中国渡来のものである。もともと「瘦」は小便を意味し、「瓶」と同じく唐床音であった。我が国でこれに類する道具は、かつて、尿管、清器、シハコ清器、オホツボ虎子などと呼ばれていた。因みに、現在でも残っている「御丸」という言い方は、『安齋隨筆』(伊勢貞丈著)などによると、『記紀』に見られるような「尿マル」、「尿マル」といった言い方に由来するらしく、「マル」は元来「放ル」と同義であったとされる。

三、『日ボ』以外の文献に見い出し難い語としては、「薬筒」「筒じん」「煎じ減らし」の語があり、それぞれ、『日ボ』に「馬の口に薬を注ぎ込んで飲ませるのに用いる管」「腫物とかその他傷ついた部分とかにさし込む金属性の小さな筒であつて、それを通して、ある体液とか膿汁とかが出るようにするもの」「薬を煮て水分を少なくする」と説明されている。このうち、特に「筒じん」は、刺絡法や蝨鍼法と共に、瀉血療法のひとつである角法に相当し、現在の吸い玉とほぼ同義のものである。古くから中国では、鍼刺して採血することを湿角法として、また、直接皮膚の上に吸血器を貼付することを乾角法として区別しており、この後者の吸血法に、(6)甕などの他、青竹筒が使われていたという記載があつて、その青竹筒の形が瓢に似ていたことから「吸瓢」と称され始めたものらしい。これは、後に、西洋医学の影響も受けてガラス製のものへと姿を変えていくことになるが、織豊期に金属性の吸い玉が使用されていたという『日ボ』の記事は貴重なものと言わねばならない。

四、『日ボ』以後の文献に見い出せない語はない。但し、「沙鉢」は、江戸前期の『和漢三才図会』などに記されて以

降、やがて用いられなくなっていく。この「沙鉢」といふ言い方は、そもそも「浅鉢アサハチ」の略語化したもので、皿形の浅くて大きな鉢を指し示しているが、『色葉字類抄』に既にその名が挙げられてあることから、平安末期には既に「サハチ」と呼び慣わされていたものと考えられる。

五、用具と言葉の一对一の対応関係から離れて比喩として機能し始める語に、「薬刀ヤクドウ」の効め、「薬研ヤクケン」の女陰、「灸シ」をすえるシ懲らしめる」の三つがあるが、いずれも『日ポ』に於いては比喩の意味で扱われていない。ところで、「薬刀の験ありて汗したるこそうれしき物なれ」（俳諧・類船集）、「薬代にやげんを売って考を立」（雑俳・柳多留97）、「物をきめる事をくぎをさす、きうをすへるといふ事、此事よりぞ初りける」（三埜増鱗祖）とあって、三語とも比喩として文献に登場し始めるのは、江戸中期以降のことである。

六、用途の変化という観点からは、「温石」と「薬鐘」の二つが重要である。

「温石ニ」薬用を用いるある種の青い滑らかな小石」という『日ポ』の説明だけでは、用途も原石も明らかではないが、この「温石」を巡る論議が江戸時代にはいくつかなされている。その中で、例えば『塩尻シキカハ』（天野信景著）に「温石。或人問、本草に古きシキカハ磚シキカハを焼て身を温むる事あり。亦証類本草には堅き石を焼暖め用ゆるを温石といふのみ。別に温石といふ石あるに非るよしいへり。然るに世に温石とて、青色帯る石を殊に温石と呼、如何(8)」という件があり、一般に、温石には懐中用の焼き石の類のものと、それとは別系統の青色のものがあつたことが判明する。『日ポ』で扱われている「温石」は、後者の系統のものであるに違いなく、この前述の問に対して『塩尻』の中では、続いて次のような答えが返されている。「山東通志に、掖県シキカハという所より出る石に、青色を兼潤膩玉のごとくなる物を温石と称す。是我国にいふ温石と同じ、されば冬日風烈しき時は弓の弦折安し。然るを此石の末少し指につけて弦をしごけば柔軟なる事夏月の時張るにひとし。是暖温の性ある石の証し也、他の石にかかる事なし。されば証類の説は彼石を知らずしていへる成べし」。この意見は、『筆のすさび』（橋泰著）に於いて論じられているものともほぼ一致し、両者の内容から判断する限り、『日ポ』にあ

る「青い滑らかな小石」とは、従来、滑剤用として扱われていたものであろう。その他に、また、「温石に軟硬の二種あり。丹後普甲嶺のものは、蒼白色黒みを帯ぶ、硯材となすべし。但質軟なり。丹波大枝山の鬼が石窟辺いはやのものは、普甲嶺のものと同同じ、伊勢朝熊山のもの硬なるもの多し」という論稿なども見られ、「温石」なる呼称が、江戸時代に於いては、焼き石、滑剤、硯材など、幅広い対象について用いられていた事実を垣間見ることができらる。

一方、「薬罐」は、『下学集』（二四四年）では薬用道具のひとつとして挙げられているのに対し、『日ボ』の説明には、「薬を煎じるためのある種の深鍋。これが本来の意味であるけれども、今では湯をわかすある種の深鍋の意味で通用している」とあることから判断して、室町後期には、もっぱら湯沸かしのための用具の呼び名として定着していた模様で、それは、そのままの形で現在にまで至っている。

七、収納用具は互いに用途が混同され、『日ボ』の説明に従えば、薬の他、茶や火薬などもこれらに納められていた。具体的には、まず「薬袋」と「薬籠」に関して、『日ボ』では前者が「薬入れの小袋」、後者が「薬入れの袋、また、鉄砲用の火薬を入れて携行する小瓶」とあり、やや区別が曖昧ではあるが、一応、当時、前者を保存用、後者を携行用として分けて使っていたとも考えられる。

「印籠」並びに「薬籠」と「薬籠」に関しては、常時変わらぬ統一した区別を見ることは難しい。「印籠薬籠。二つとも唐物なり大きき定まらざれども大既径三寸五分計にて重ぬるなり三重四重あり飾は堆朱堆黒螺鈿等種々あり其の形圓なるを薬籠と云ひ四方なるを印籠と云ふ薬籠は薬入れなり印籠は印と印色を入れるものなり今世も右の二色此方へ渡りたるを傳へて座席の飾り違棚などの置物にするなり此方にて今世印籠と名けて小さき重ねに両方に紐通しの管を作り付けて緒を通して腰に付くるは彼の右に云ふ所の薬籠印籠を小さくしたるが如き物なりされば薬を入れるものを印籠と云ふは名の唱へ違ひなり小さきものなれば印は入られず薬を入れるものなれば薬籠とこそ云ふべけれ。小し長くなつたが、上記は『安齋隨筆』からの引用で、ともかく、印籠はかつて印肉入れだった。これがいつ頃から薬入れ専用となつたのか、

『日ボ』の「印籠」は、葉その他の物を入れる小箱。それにはいくつかの仕切りがあつて、それらの仕切りは互いに重ねて嵌め込むようになってゐる」という説明によると、織豊期の「印籠」は既に江戸時代のものに近く、「印籠」が文字通り印肉入れとしての用のみを果たしていたのは室町時代までということになる。一方、「葉籠」は葉入れの小箱、「葉籠」または nacatuguni (中継) 碾いた茶を入れるある種の小箱」といった具合に、『日ボ』の時点では「葉籠」と「葉籠」は区別されているが、「葉籠」は、もと「葉籠」からの音の転じたものだといふ説もあり、両者は江戸時代に殆ど同義で用いられている。但し、このうち「葉籠」の方は、室町時代に書かれたとされる『奇異雑談』という書の中に蠟燭管や火打管として描かれていたらしく、後に、『守貞漫稿』でも「医者病家に携へ往く葉種数十品を納めたる重ね管或は引出し箱の類を今は葉籠と云。是にはやろうと云ずやくろう或は葉箱と云也」と記されるように、やや大型の箱は常に「葉籠」と称されたものらしい。

その他、葉の収納用具として御馴染みの「百味簞笥」は、『日ボ』には収録されていない。

八、『日ボ』に付された説明の中で特に注目に価する事項として、「葉貝」は葉を詰める牡蠣、または二枚貝の殻と「竹刀」ある葉草とか葉用になる根とかを細かく切るのに使う竹製の庖丁、または、小刀。鉄の刃物は「葉効に」害になるからである」の二つがある。

貝、竹、両者とも、かつて我が国では医療や生命力のひとつの象徴として考えられた向きがあつて、例えば、「於是は上比売答八十神言、吾者不聞汝等之言。將嫁大穴牟遲神。故爾八十神忿、欲殺大穴牟遲神共議而、至伯岐國之手間山本云、赤猪在此山。故和礼共追下者、汝待取。若不待取者、必將殺汝云而、以火燒似猪大石而転落。爾追下取時、即於其石所燒著而死。爾其御祖命哭患而、參上于天、請神產巢日之命時、乃遣蛭貝比売与蛤貝比売、令作活。爾蛭貝比売岐佐宜集而、蛤貝比売待承而、塗母乳汁者、成麗壯天而出遊行」という『古事記』の記録、同じく『古事記』の雄略天皇の条に「竹」が「多氣」と記されていたことなどからも、その事実を推し測ることができ

る。ところで、この薬貝の風習はいつ頃から行われていたものか、『言継卿記』の天文一八年（一五四九年）十月十四日の記に「一条殿へ参、先度薬貝被下御礼申候」とその姿を現わしている。さらに遡って、鎌倉前期の『続古事談』では蛤の中に薫物を入れる様子が描かれており、これなども薬貝と無関係なものではないだろう。ともかく、貝も竹も食用に利用される他、古くから我が国では身辺雑具として重宝され、『日ボ』の何気ないこうした記載の中にも、今では失われつつある原始的な感覚に裏打ちされた生活の香りを嗅ぎ取ることができるのは、非常に興味深い。

なお、最後に付け加えれば、「煨<sup>ウヰ</sup>する」というのは、灰の中で物を焼く、即ち、うずみ焼きにするという意味で、『日ボ』には「煨する」物を灰の下へさし入れる。たとえば、葉を暖めたり、葉から滲み出る液を取り除いたりなどするために、葉を濡れ紙に包んで灰の下にさし入れる」とあり、これは、古く中国の南北朝時代の書と称される『炮灸論』に薬の修治法のひとつとして記されて以来伝わっているものだが、一般の生活の中ではあまり使用されることのないこのような語まで記載されているという点からも、『日ボ』の収録範囲の広さが窺われる。

以上、医療用具に関する問題を八項目に纏めてみたが、次回では、『日ボ』に見られる薬物を取り上げたい。

#### 文献

- (1) 松田毅一著「南蛮史料の発見」中公新書 昭和四十九年。
- (2) 同右書。
- (3) アルメイダ一五六四年十月一日付、豊後発印度会友宛書簡 [Cartas 1.f. 43v.] (海老沢有道著「南蛮文化」日本歴史新書、昭和三十三年)。
- (4) Frois, Geschichte S. 202. (同右書)
- (5) 御蘭家歴傳略記(富士川游著「日本医学史」昭和一六年刊本、二四六頁)。
- (6) 丹波康頼著「医心方」巻八、永観二年。
- (7) 慎微撰「証類本草」一一〇八年。
- (8) 天野信景著「塩尻」元禄享保一八年成立(日本随筆大成第三期一四卷)。



- (9) 橋泰著「筆のすきび」文化三年刊（日本隨筆大成第三期二卷）。
- (10) 山崎美成著「本朝世事談綺正誤」享保一九年刊（日本隨筆大成第二期一三卷）。
- (11) 伊勢貞丈著「安斎隨筆」（吉川弘文館、昭和四年刊本）。
- (12) 「古事記」（日本古典文学全集一、小学館、昭和四八年刊本）。

（東京医科大学第二解剖学教室）

## Medicine in the Azuchi-Momoyama Era as Seen in the Japanese-Portuguese Dictionary

(I) Medical Instruments

by

Setsuko KAME, Akira OHTSUKI, Kyutaro MAEKAWA

“The Japanese-Portuguese Dictionary (translated into Japanese)” was published in 1980. The original dictionary written in Portuguese was compiled for Portuguese missionaries who had needed to learn Japanese, and published in 1603 at Nagasaki. This dictionary contains nearly thirty thousand Japanese words from the Azuchi-Momoyama era. We can find therein about one thousand three hundred words which are concerned with medical treatments, diseases, medicines, and what not.

This paper introduces these words adding some considerations.

At first we deal with such words as related to medical instruments. We can pick up sixty-five words and divide them into eight classes such as follows: 1: There are some noteworthy words on

acupuncture and moxibustion such as Tomebari (止針). 2: Hirabari (平針), Nyubachi (乳鉢) and Shibin (澆瓶) had not been before the appearance of this dictionary. 3: Except in this dictionary we can hardly find the words Kusurizutsu (藥筒), Tsutsujin (筒じん) and Senjiberashi (煎じ減らし). 4: There are no words which we cannot find in the books published after this dictionary. 5: Yakuto (薬刀), Yagen (薬研) and Kyu-o-sueru (灸をすえる=apply moxa) had come to function as metaphors thereafter. 6: There are two important words .....Onjaku (温石) and Yakan (薬罐) .....from the viewpoint of change of meaning. 7: Various kinds of instruments in which medicines were kept had been used in those days. 8: Some traces of primitive meanings are seen in explanatory notes of this dictionary.